

『恩物』に就て

倉 橋 惣 三

○世の中に分り難い言葉も少くないが、恩物といふ言葉分り難いのは多くない。幼稚園の経験のあるものは別として、その他の人に恩物など、言つても何のことか通用するものではない。名は實をあらはすなど、古めかしく講釋を初める譯ではないが、物の名は成るべくは分りいゝ方がよろしい。勿論何事にもそれぐゝの道の用語術語があつて、深い意義は誰れにでも直ぐ分るといふ譯にはゆかない。しかし一寸聞いて大體大凡の見當位はつくのが、普通である。恩物に至つては見當もつき難い。『はゝあ、殿様から御拜領にでもなりましたもので御坐りまするか』位の處が落ちである。斯ういふ六かしい言葉は出来ることなら平常使はない方がよいと思ふ。

○幼稚園教育の歴史を辿つて、フレーベル先生

の教育説を攻究するといふ場合には、それは言ふまでもなく原語通り *Gabe* (恩物) を *Gabe* として研究しなければならぬ。又フレーベル先生の深い思想の籠つて居る此の言葉に對して、適當なる敬意を拂ふことを忘れてはならない。しかし、それは昔のものを昔のものとして貴重する研究上のことである。毎日の保育が始終古典によらなければならぬといふことはない。

○彼の所謂恩物なるものは、要するに幼児用の玩具である。色のついた毛糸の毬にしても、積木にしても、色板にしても、金輪にしても、箸にしても、いづれか持つて遊ぶに面白き玩具ならざるである。しかのみならず、之等のものは決して必ずしもフレーベル先生によつて發明せられたものではない。其の以前から何處にでもあつたもので

ある。別に何の本に書いてあるとか、何處の古丘

から發掘せられたなど、六かしい論は持ち出さず

とも、毬や板や棒片きんが子供の玩具に用ゐられたこ

とは、希臘の昔にも埃及の昔にもあつたことに相

違ない。文明人ばかりではない。野蠻人の子供で

も此の位ゐる玩具は知つて居るだらうと思ふ。そ

れが、『フレイベル氏恩物』といふ名稱の下に、如

何にも特殊なるものとして取扱はれて居るのは、

何故なぞなのであるうか。いふ迄もなく、フレイベル

先生が之等の珍らしくもない玩具の中に見出し、

而して組織した教育上の理論によるのである。即

ちその理論に對して特殊なる取扱をするのであ

る。是に於て、所謂恩物の恩物たる處は、理論に

あつて、物にあるのではないといふことは、少し

く事を分解して考へ得る人には直ぐ分ることであ

る。更に言葉をかへて言へば、恩物とは、彼の品

品が幼児の玩具として多くの有功なる點を持つと

いふフレイベル先生の考へから、賞讃的に附けら

れた名稱なのである。

○フレイベル先生の時代には、玩具の教育的價

値に就て、未だ眞の解釋が出來て居なかつた。即

ち、何か理のつんだ寓意か考案のあるものでなけ

れば、教育的でないもの、様に思はれて居た。そ

こで、理屈の附いた恩物を、一般の玩具から區別

して、特別に貴いもので、もあるかの様に取扱つ

たのである。少しでもフレイベル教育説を研究し

た人の知つて居らるゝ通り、先生には物を六かし

く考へ過ぎる論理癖があつた。總てのものに奥の

意味を附けようとする象徴癖があつた。これは先

生の偉大なる一面をなしたものであつたが、又

確に一つの缺點でもあつた。殊に幼児にとつては、

理の勝ち過ぐるといふ極く不似合のものであつ

た。而して恩物といふ意味深長な(命名者にとつ

て)名稱も、此の象徴癖から出來たものなのであ

る。

○玩具は玩具でよろしいではないか。近世の

兒童研究は子供の遊戯の眞意義を闡明して、遊戯といふ言葉の品位を高いものにしたと共に、玩具といふ言葉をも昔の所謂『もてあそびもの』とは趣の異つたものたらしめた。推しつめた理屈からいへば、世間で往々いふ教育的玩具なる言葉が餘計な語であると言つてよい位、玩具そのもの、本來性が教育的なものと理解せられて居るのである。斯くの如く玩具なる語の尊嚴が認められて居る世に、幼稚園で用ゆるからとて、わざ／＼別の名をつける必要は少しもない。

○モンテッソリー女史考案の保育玩具は伊太利の原語では何と呼べる、か知らないが、英語では Didactic material 即ち『教育材料』と譯されて居る。處が可笑いことに、『モンテッソリの恩物』といふ言葉が時々使はれて居る。幼稚園では何もそんなに恩物といふ言葉を用ゐなければならぬものであろうか。今年の三市聯合保育會の研究議題の中に『二十恩物以外保育材料として現今使用せら

る、恩物。あらば其の種類並に使用方法を承りたし』といふのがある。此の提出者の意味は充分よく分つても居り、又至極く有益な研究題であると思ふが、こゝにも恩物といふ言葉に執着し過ぎて居らるゝ觀がある。

○恩物の原語 (Gabe) には恵まれたる物、即ち天恵物といふこゝろがあるが、若し、そういふこゝろからいふならば、木の葉、石ころ、すべての自然物ほど、眞に天恵物であるものはない。そういふ意味で此の言葉を用ふるのならば、極く／＼廣い範圍に、あらゆるものが恩物といはるゝであらう。斯ういふと如何にも、言葉の上の揚げ足取りの様であるが、餘り恩物々々といふ言葉を口癖のように使はるゝのを聞くと、斯ういふ理屈も言つて見度くなる譯である。

○余は嘗てフレイベル先生の恩物論を、餘りに抽象的に、又象徴的であるといふ點から、甚だしく批難したことがある。之れは何も余の獨創でも

なんでもなく、發生的に幼児教育を行ふとする人の皆一致する論でなければならぬ。余は今日に於ても勿論此の批難を固持して居るものである。併し。余の批難したのは恩物論であつて、木片、板、棒片、そのものではない。あれは立派な玩具である。殊に單純で、しかも用法の範圍の廣い面白い玩具である。その教育的（心理的意味にて）効果も決して尠くないものである。あれを玩具として幼児に自由に持ち遊ばしむることに於て、決して彼之れといふものではない。少くも、それに事らしい長論議をするものではない。たゞ、どこ迄も玩具である。それへ特別に大人の理屈を附けて、その理屈を以て幼児に強ゐんとするのが、實に誤

謬だといふのである。積木遊び、板ならべ遊び、紐遊び、その他何あそび、何あそび、皆幼児に面白い、いゝ遊びである。併し、恩物として取扱はなければ教育的でないといふならば。それは古い誤謬から今も尙脱し得ない間違ひである。恩物としてならば批難する。玩具としては賛成する。之れが明白なる余の論なのである。

○いつそ間違ひの起らないように、『恩物』といふ言葉を平常は使はない様にした方がよいかも知れない。それでフレイベル先生の偉大が少しでも傷く譯ではなく、また尊敬すべきフレイベル先生は却つて地下にそれを喜ばるゝことゝ信ずるのである。

砂場の屋根に就て

倉 橋 生

幼稚園に砂場の必要なことは言ふまでもない。

従つて、どこの幼稚園でも大抵砂場のない處はな